
IS<インフィニットストラトス>鈴のお兄ちゃん

シャルロット マジ！萌！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニットストラトス<鈴のお兄ちゃん

【Nコード】

N3892U

【作者名】

シャルロット マジ！萌！

【あらすじ】

両親が離婚した。そのことがきっかけで俺と妹の鈴も別れることになった「やだよ…お兄ちゃんと別れたくない」泣きながら言った鈴の言葉が悲しく耳に残っていた

主人公設定（改）（前書き）

名前をもっと中国人っぽくしました

主人公設定（改）

名前 凰 鈴劉

（ファン リンユウ）

両親が離婚して鈴は母親に引き取られ、鈴劉は父親に引き取られた。

父親に引き取られた和樹は父親と、ともに中国へ行った。

しかし中国で父親が病死して路頭に迷っていて偶然東の隠れ家に入ったことで東に気に入られ助手になる

使用IS

名前 光龍

（こうりゅう）

第4世代 設計者 篠乃之 束

防武

剣 ショートレンジ 白虎双刀

（ビッコソウトウ）

基本双剣で2個合わせると大剣になる右手に持つ方が虎の牙

ISのシールドエネルギーを大幅削ることができる、シールド無効化攻撃が付いている。

左手に持つ方が虎の爪

ISとの戦闘向き

槍 ミドルレンジ 青龍演月槍

（セイリュウエングツソウ）

相手のビーム射撃を無効化できる

ビーム射撃タイプの敵との戦闘向き

弓 ロングレンジ 朱雀演武

(スザクエンブ)

1対多でも多対1でも活躍できる

支援タイプの武器

盾 シールド 玄武反響

(ゲンブハンキョウ)

ビーム射撃のみ跳ね返すことが可能

BIT兵器×10

ソードBIT×6

シューティングBIT×4

通常は6個まで同時操作できる

プロローグ（改）（前書き）

名前をもっと中国人っぽくしました

プロローグ（改）

とある個室

そこには無数のパソコンと女性と少年の影があつた女性の水色と白色のドレスを着ている。

それはまるで一人でアリスを演じているようだった。

少年は椅子に座つて一枚の写真を見ていた。突然写真を見ていた少年は涙をこぼした。

そして少年は自分にしか聞こえない声で呟いた 「……鈴」

「そんなに別れた妹に会いたいの？」

突然パソコンを操作している女性に話しかけられた

「！まあー会いたいですけど俺はISを操作できませんから無理ですよ東さん」

「そうだよねーISさえ操作出来ればねーちーちゃんに頼んでりん君をIS学園に入れられるのにな」

あつそのこのパーツ取って」

「このパーツですか？」

このぐらい自分で動いてください」

取ったパーツを束の所に持って行こうとしたときアクシデントが起きた この時束さんと自分が協力作っていたIS触ってしまった。ISは女性にしか反応しないはずだった

だが、気がつくと自分がISを纏っていたこのことが俺の人生を変えた瞬間だった

「すごい！ 試作機の光龍がリン君の専用機になった 良かったねリン君これで妹に会えるよ」

束は声を弾ませながら言った

「やったこれで妹に会える それに一夏にも会える」

かずやも声を弾ませながら言った

「じゃ私はこの光龍を完成させるから、リン君は先に休んでて」と言い束はISの整備をし始めた

鈴劉は束の好意に甘えることにして自室で休むことにした

S I D E O U T

同時刻 保健室

保健室のベッドで一夏は寝ていた。

クラス対抗戦で鈴と闘っているとき突然無人機のISが空から落ちてきて自分達を襲って来た。

一夏達はなんとか無人機を倒すことが出来たが無人機の最後の足掻きでビームを油断していた鈴に向けてそれを打った一夏は鈴を庇いそのビームを受けた

そして無人機と一夏は倒れた

第と鈴とセシリアは倒れた一夏を庇いながら保健室に行った

そして今保健室には鈴と一夏しかいなかった

鈴は寝ている一夏を見ながらさっきまでのことを思い出していた。油断していた自分を庇ってくれたこと自分の思いに気づいてくれないことそんなことを考えているとき一夏は目を覚ました

「…鈴？」

「一夏！…良かった」

「…鈴…どうした？」

「…何でも無いわよ」

鈴は照れながら一夏に行った

「そう言えば鈴家族は元気か？」

久しぶりにお前の兄貴に会いたいな」

一夏はなにげに鈴に家族のことを聞いた

鈴はみるみる顔色を暗くして言った

「うち、両親別れたのよ 私はお母さんの方に引き取られたの お兄ちゃんはお父さんの方に引き取られたのもう6年も会ってないの 会いたいよお兄ちゃん」

鈴は泣きそうな声で言うについに泣き出してしまった。

「ちよ…鈴大丈夫か？」

まあ元気出せよあいつのことだからなんとかやっってるはずさ」

「…うん じゃ部屋に戻るね」

そう言つと鈴は保健室を後にした

「鈴」

一夏は呆然としていた

次の日にあんな事になるとは誰知らない

第1話(改)(前書き)

名前をもっと中国人っぽくしました

第1話(改)

第1話 再び会う龍

俺がISを動かしてから1日たった次の日、俺はIS学園に転校することになった

「ここがIS学園か」

「遅いぞ！鳳」

校門の奥から聞いたことのある声がした

「お久しぶりです千冬さん」

「久しいな、鳳 後ここでは織斑先生だ！」

「はい、以後気おつけます」

鈴劉は自分の立場を理解し千冬の注意を素直に受けたその姿勢を見た千冬は呆れながら言った

「物分かりがいいな、あの馬鹿も見習って欲しいな」

「織斑先生、俺は何組ですか？」

「私のクラスの1組だ、妹とは離れるが、やはり同じ男子がいたほうがいいだろう？」

「そうですね」

鈴劉は悲しげに言う 千冬はそんな鈴劉のことを構わず言った

「時間だそろそろ行くぞ付いてこい鳳！」

鈴劉は千冬に付いて行くと廊下に2二人の少年と少女が立っていた

「今日、お前と一緒に転校する奴だ転校生同士挨拶しておけ」

「鳳 鈴劉です、これからよろしく」

和樹が挨拶をすると二人の少年、少女が返してくれた

「シャルル・デュノアです。こちらこそよろしく」

金髪の少年は丁寧な挨拶を返した

「ラウラ・ボーデビツヒだ」

銀髪の少女は冷たく挨拶を返した

「私と呼んだら教室に入ってくれ」

そう言うと千冬は教室に入ってしまった。

少しするとパアンと乾いた音が聞こえた

「転校生を紹介する入ってこい」

千冬が呼んだので俺達は教室に入ることにした

「よし まず凰挨拶をしろ」

「はい 凰ファン 鈴劉リンリウです 最近日本に戻って来たので分からないこ

とが多くありますが これからよろしく」

「キャ「次」」

クラスの女子が騒ごうとした瞬間千冬が防いだ

「シャルル・デュノアです。フランスから来ましたこれから1年

間よろしくお願いします」

シャルルが挨拶が終わると一斉にクラスの女子が騒ぎ始めた

「キャーーーーー」

「クラスに男子が3人も」

「しかも一人はクール系 もう一人は守って上げたくなる系の」

「お父さんとお母さんに感謝しなきゃ」

「あたし地球に生まれて良かった」

最後の人大げさです、と思いながらクラスを見回した

「鈴劉か？」

突然一番前の席に居る一夏が俺の前立った

「久しぶりだな一夏」

「ああ久しぶり鈴劉」

一夏と鈴劉はお互いに握手をした瞬間

「席に着け馬鹿者」

バシン！ と千冬は手に持っていたクラス名簿で一夏の頭を叩いた

「鳳、こうなりたくなかったら私の言いつけは守れわかったな？」

「はい」

鈴劉は唾然としてはいとしか言えなかった

「次、ラウラ挨拶しろ」

「はい、教官 ラウラ・ボーデビツヒだ」

ラウラは挨拶をすると一夏の前に立ったそして一夏を叩こうとした、俺はすかさずラウラの腕を取った

「貴様！ 何をする！」

「お前こそ何をする？」

「ふん、こいつが教官の名に泥を塗った、私はこいつを許さない」

ラウラはそう言うその後ろの席付いた 「SHRは以上だこの後座学が1時間会ってその後実習だ授業には遅れるな」

「「「「はい」」」」

千冬が言うクラスみんなが返事をした

千冬達が教室から出て行くとガダンと勢いよく教室のドアが開いた、そしてそこ立っていたのは

第2話（改）（前書き）

名前をもっと中国人っぽくしました

第2話（改）

<第2話再会する龍

千冬達が教室から出て行くとガダンと勢いよくドアが開いた
開いたドアに立っていたいたのは

「…お兄…：…ちゃん…」

今にも泣き出そうな鈴だった

「…鈴」

「お兄ちゃん！」

鈴劉が鈴を呼ぶと鈴は泣きながら鈴劉に抱きついた。

「鈴」

鈴劉は泣きながら抱きついて来た鈴を優しく抱きしめ頭をそつと
撫でた

これが兄妹の6ぶりの再会だった

「お父さんとお母さんが別れてからずっと寂しかった、だからお
兄ちゃんお願い、もうあたしから離れないで…」

「ごめんな…：鈴、俺はもう鈴から離れないから安心しろ」

「うん、お兄ちゃん」

と言うと鈴は笑顔になつて頷いた

そしてクラスが感動の雰囲気にも包まれた、クラスの女子の中には
ハンカチで涙を拭く人や涙ぐむ人もいた

「一夏^{さん}感動だな（ですね）」

と箒とセシリアが一夏に話し掛けた 「ああ、そうだな」

一夏も素直に答えた

「僕こんなに感動的な場面見たの久しぶりだよ」
シャルルも涙ぐんでいた

その雰囲気を一瞬で壊す人がいた、そう千冬だ。

バシン！パアン！と音を鳴らして、鈴劉と鈴の頭を叩いた

「授業の時間ださっさと席に着け」

「「「「はい」「」「」

こうして兄妹の感動の再会は世界最強のIS使いによって幕を閉じた

第3話上（改）（前書き）

名前をもっと中国人っぽくしました

第3話上（改）

第3話学ぶ龍 上

一 時間目の授業が終わった次の授業は実習だ

「シャルル！、鈴劉！急ぐぞ付いてこい」

と言うと一夏は慌てて二人の腕を引っ張った

「どうしたの一夏そんなに慌てて？」

シャルルは意味が解らず一夏に聴いた

「急がないと次の実習に間に合わない、遅れたらあの名簿が飛んでくるからきよつける」

一夏は自分の実体験を加えて話した

「わかった、急ごうえむちか」

鈴劉はさらっと冗談を混ぜて言う

「ちげー！ー！ー」

一夏が勢いよく否定してきたそんなやりとりをしてる間に更衣室に付いた

「よしじゃさつさと着替えよう」

そうゆうと一夏は颯爽と服を脱ぎ始めた

「わあ！」

シャルルは顔赤くして驚いた、俺は時間がヤバいから気にせず着替えて実習場所に向かった

実習場所に着くと、そこにはジャージ姿の千冬がいた

「凰兄ギリギリだ次からもっと早くこい、後これを渡しておく束からだ」

鈴劉は千冬からとんぼの形をしたブレスレットを受け取った

「ありがとうございます織斑先生」

鈴劉は千冬に礼をすると自分の列に戻った、その10分後、一夏

とシャルルが来たが一夏だけが名簿で叩かれた

「これから実習を始める！ 凰妹、オルコット前に入る！」

と千冬が鈴とセシリアを呼ぶと二人がめんどくさそうに前に出た

「何であたし（わたくし）が」

と二人して同じことを呟いた

それを見た千冬が二人に耳打ちするその瞬間二人は見る見るやる気になった

「やっぱりあたしがやらなきゃ（一夏とお兄ちゃんにあたしの実力を見せれる）」

「代表候補生の力を見せるにはいい機会ですね（ふふふ一夏さんにわたくしの実力を披露できますわ）」

「相手は誰？、なんならセシリアでもいいわ」

「こちらこそ構いません」

二人はお互いに火花を散らしていた

第3話下（改）（前書き）

名前をもっと中国人っぽくしました

第3話下（改）

第3話学ぶ龍 下

二人が火花を散らしていたとき俺、空見ていた。

空は綺麗だ、自由で溢れている

空を見ていたら突然一夏の方にISを纏った山田先生が落ちていった

「うーん「あのー織斑君」はい？」 「どいて下さい、でもこのまま行くと織斑先生が義理の姉に」

一夏は山田先生を押し倒した形になっていた、一夏は慌てて山田先生から離れた瞬間ビームが飛んでいった打った方を見ると

セシリアが「おほほほ外してしまいましたわ」と言い、

鈴が「一夏ー！」

と叫びながら両手にある青龍満月刀を連結させて一夏目掛けて投げ出した。一夏は慌てているが山田先生は冷静に青龍満月刀を狙ってライフルを構えて打った。青龍満月刀はアリーナの真ん中に刺さった。クラスのみんなが驚いた

「山田先生は元代表候補生だ」

「所詮は代表候補生止まりですよ」 千冬と山田先生のやりとりがあった。そして始まった山田先生VS鈴、セシリアの模擬戦が始まった。

結果的にやはり山田先生が勝利した問題はやはり二人の連携不足だったもう少し連携がとれていれば二人まとめて倒さなかったと思う 負けた鈴は

「くーせつかくお兄ちゃんに良い所を見せれるはずだったのに」と小声で言うつと落ち込んだ

それを見た鈴劉は鈴の近くにより

「惜しかったな鈴」と優しく声を掛けて頭を撫でた。

鈴は「¥¥¥¥えへへ¥¥¥¥」と目を細めて気持ちよさそうにしていた。クラスの女子は「良いなー」「鈴さん変わって」など言っていたが鈴が「お兄ちゃんになでなではあたしだけなの」と言っ

鈴は俺から離れなかったが千冬の「各自で班を組め！リーダーは専用機持ちがやれ」と言うクラスみんな、一夏、シャルルに集結した。

女子の一人が俺に聴いてきた

「鳳君は専用機持つてるの？」

俺は

「一様あるぞ」と言った瞬間みんなが俺の周りに集まって来た「どんなISなの？」

「何処製？」という質問に俺は淡々返した「第4世代らしい」「束製」と答えたらクラスみんながどんどん盛り上がったがやはり彼女によつて鎮火された「うるさい番号順で組め」千冬の一言で瞬時に別れて実習をした。俺はまだISに慣れてないので鈴と同じ班だった鈴の顔は不思議と赤く染まっ

た鈴の顔は不思議と赤く染まっついていて上機嫌だった。実習中にふと一夏と箒の方を見ると二人は屋上で昼食を食べる約束をしていた。

第3話下（改）（後書き）

皆様感想ありがとうございます

感想の中で文が短いと言う声 came たのでこれからはスマホでいまいち長さを掴めないけど文を長くするように努力するので見守ってください

第4話（前書き）

いつもより長くしました

これからはこの位にしていきたいです

第4話

第4話休む龍

昼休み俺達は屋上で昼食を食べていた、メンバーは俺、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルの6人だ

俺とシャルルは来る途中で買ったパンを食べていた、一方一夏は3人からお弁当をもらっていた。

「一夏ーあたしのお弁当は酢豚よ」

「一夏さん、わたくしはサンドイッチですわ」

「一夏私はこれだ…（二人きりで食べるはずだったのに）」堂々と言う二人に対して箒はがっかりしながらお弁当を出した。

「おう サンキュー どうした、箒？」 一夏はどうして彼女があんな態度なのかと不思議に思った。

「篠乃之、すまない」

「篠乃之さん、ごめんね」

俺とシャルルは箒に小声で言った。

「嫌、お前たちは悪く無い、悪いのは唐変木の一夏だ」

「みんな食おうぜ昼休みが無くなるぞ」 一夏がそんな事を言ったから話を止めて昼食を食べることをした

「あ、いたいた、鳳君、デュノア君」昼食を食べている途中で山田先生に声を掛けられた

「どうしました山田先生？」

「あ嫌、大したことじゃ無いんですか鳳君、デュノア君の部屋が決まったので私に来ました。男の子同士仲良くね」

「はい」

「山田先生！俺は？」

「織斑君はまだ篠ノ之さんと同じ部屋です」

「そうですね」

と山田先生の言ったことに対して素直に返事した一夏は少しがっかりしていたそして俺達は昼食を再開した

「なあ、箸も食ってみろって」

「いやいい、失敗したのは全部食べたから」

「ん、何か言ったか」

一夏は自分の箸で箸から渡されたお弁当の中の唐揚げをつまんで箸に食べさせた。

「良いものだな¥¥¥¥」

「だろ！この唐揚げうまいだろ」

「いや、唐揚げのことではない」

箸は顔を赤くして唐揚げを食べた

一夏は何で箸の顔が赤いのかと不思議に思ってた

「これってカップルがするって言うはいあーんってやつ？」

シャルルが言うのと鈴とセシリアは否定してきたが、一夏は何のこ
と分からないような顔をしていた。

箸はひたすらに赤い顔を隠していた

「お兄ちゃん」

「ん？なんだ鈴」

鈴は俺を呼ぶとタッパの中の酢豚をレンゲでひとすくいすると顔を赤らめながらこっちを向いて「¥¥¥¥あ、あーん¥¥¥¥」
と言ってレンゲを俺の口元に運んで来た

「鈴は甘えん坊だな。」

と言つて俺は鈴の酢豚を口に含んだ 「なかなか上手いじゃない
か。よくここまで上達したな」

そう言つて俺は鈴の頭を撫でた

「うん、あれからちゃんと勉強したから」

鈴は自慢気に言った

「そっか。一夏も食ってみる美味いぞ」

俺は一夏を促すと一夏も鈴に食べさせて貰った

「確かに美味しいな」

俺と一夏が鈴の酢豚で話していると鈴が照れながら

「今度はお兄ちゃんの料理が食べたいな」

「わかった今度作ってやるよ。その時はみんなでな」

そう言うのと篤達は俺に自分達も手伝うと言ってきたが俺がみんなを招待するから気にするなと言った

「そういえば一夏放課後お前たち特訓してるんだろ、俺も明日から参加させてもらおう」

「ああ、わかった、でも何で明日から？」

俺の言うこと一夏は疑問で返してきた

「この後織斑先生に呼ばれてるからな」

俺は簡潔に答えた

「じゃしょうがないな、シャルルも俺達と特訓しようぜ」

一夏はシャルルに声を掛けるとシャルルは喜んで参加するといったこうして昼休みが終わり、午後の授業でも一夏はさんざん叩かれたそして放課後千冬の所に行った

「織斑先生、話は何ですか？」

「ああ、話と言うのはデュノアについてだ。」

「お前はデュノアと同じ部屋だから彼に気をつける」

「なぜですか？」

「特に理由は無いだがこれはブリュンヒルデの勘だ」

「わかりました。気を付けてみます？」

俺は織斑先生の話を聞いた後、頭に？を付けながら部屋に戻った

第5話（前書き）

今ラウラを義妹にしようかなと考えています

第5話

第5話 眠る龍

織斑先生の話を聞いた後俺は食堂で夕食を食べていた。

「中華料理が少ない」

俺が中華料理が少ないことにながっかりしている所に両腕を箸とセシリアに抱きつかれている一夏と会った

「よお一夏、両手に花だな」

「ん、なにがだ？」

俺の質問に対して一夏は訳の分からなさそうな顔をしていた

「「はあ、唐変木が（ですわ）」」 箸とセシリアは呆れていた

「一夏もう少し察してやれよ」

「何をだ？」

「もういい」

とりあえず俺は一夏を無視して（麻婆豆腐丼 激辛）を頼んだそしてテーブルに置き先に食べていた

「お前麻婆豆腐好きだな」

「俺は辛い物が好きなんだ」

「見ているだけで口が辛くなる（なりますわ）」

「まあ始めだけ辛く感じるかも知れないけど実はそこまで辛くないぞ」

一夏と箸とセシリア達と話しているとそこにラーメンを持った鈴が来た

「一夏、お兄ちゃん一緒に食べよ」

「おう鈴来たのかとりあえず鈴劉の隣に座れよ」

「うん、わかった」

そのまま鈴を加えて夕食を食べた

「あ、お兄ちゃん麻婆豆腐だ。一口ちょうだい」

鈴が俺の麻婆豆腐を欲しがって来たが俺は鈴のことを気遣い控えるように言った

「鈴多分は食えないからやめとけ」

「一口だけだから、だめ？」

鈴は上目づかいで迫って来た

「わかった一口だけだからな」

そう言っただけ俺は麻婆豆腐を一口分レンゲですくって鈴の口元持って行き鈴はレンゲを口に入れた瞬間

「！」

「辛~~~~~い」

鈴は口を抑えながら辛さに耐えていた

「だから言っただろ、止めた方がいいって。一夏すまないがそこにあるコップをくれ」

鈴劉は冷静に一夏のコップを貰い鈴に飲ませた

「ぐくっ　ぐくっ　ぐくっ」

鈴はコップに入っていた水を一気に飲み干した

「もう大丈夫。」

「良かったな鈴、一夏と間接キス出来て」

鈴劉は落ち着いた鈴に顔を近づけて囁いたすると鈴はみるみる内に顔を赤くして俯いた。そろそろみんな食べ終わる時間になって来たから鈴劉は一夏に

「今日の特訓どうだった？」

と聞いた

「途中であのラウラが割り込んで一夏に私と闘えなんて言って攻撃してきたぞ」

俺の質問に対して一夏は少し怒りぎみで言った

「大変そうだな今度の大会、頑張れよ一夏」

「ああ頑張るさ」

俺は一夏に応援の掛け声を掛けると食堂を後にした

そして自室に戻るとシャルルがシャワーを浴びている音が聞こえていたから自分のベッドに腰掛けるとシャルルの着替えがあったからシャルルに届けようとシャワー室のドアを開けたら、そこには美少年ではなく美少女だった。「え、こ、これ着替えベッドに置いてあったよ」

「あ、ありがとう¥¥¥¥」

俺は美少女に服を渡してシャワー室を出た。

そして数分後美少年がシャワー室から出てきた

「シャルルだよな？」

「う、うん」

「どうして男装してた？」

「あのね、僕、本妻の子じゃ無いんだ。」

「すまない、聞き過ぎた」

「ううん、鈴劉には聞いて欲しい」そして俺はシャルルの事を聞いた

秘密でテストパイロットをさせられた事

家族なのに扱いが非道な事

そして唯一男でISを動かせる俺と一夏のデータを盗み出せと命令された事

俺は怒りで言葉を失った

「どうしたの？」

「シャルル、お前はこれでいいのか？、いいわけ無いだろ」

「でも、僕には今の居場所しか無いから」

シャルルは絶望しきった顔をして言った

「そんなのいくらでもやる！」

「だから俺の所に来いシャルル」

「鈴……劉」

俺の言ったことに対してシャルルは涙をこらえて俺の名前を呼んだ

「おいでシャルル」

「鈴劉……」

俺の一言にシャルルは泣きながら抱きついて来たから俺の優しく
頭を撫でて落ち着かせた

気がついたらシャルルは泣き疲れて眠っていた

そして俺は寝ているシャルルをベッドに寝かせて眠りについた

第6話上(前書き)

最近書く時間が少なくなってきた
これからもっと遅くなると思います

第6話上

第6話怒る龍 上

シャルルの秘密を知った次の日

俺は目を覚ますと目の前にシャルルの顔があった

「おはよう、シャルルどうした？」

「¥¥¥¥何でもないよ¥¥¥¥」

シャルルは顔を赤く染めて言った

「そうか、ならいいじゃ今日も1日頑張りますか」

「そうだね」

こうして今日1日が始まった

学校生活ではシャルルが女子だとばれることなく過ごせたそして放課後、俺とシャルルは一夏と話しながらアリーナにむかった

「ねえ、今ドイツの第3世代対中国、イギリスの第3世代が試合してるよ！」

俺達は嫌な予感がしてアリーナにむかった、的中そこにはボロボロになっている鈴とセシリアがいた。

これは試合というよりも虐待に等しかった。

「あいつ！」

「ちよつと落ち着いて一夏まず冷静になろうよ」

「鈴劉なんでそんなに平然としていられるんだよ」

「一夏…俺がキレてないと思ってるのか？」

鈴劉は怒りをとったり越して笑っていた

今にもキレそうだった俺を一夏とシャルルは止めてくれようとしてくれたが次の言葉で俺はキレた

「助けて、お兄ちゃん！」

そして俺腕に付けているブレスレットを前に出した

「来い、光龍！」

俺は初めてみんなの前でISを起動させた。

S I D E 鈴

あたしはセシリアと一緒にラウラと戦ったでもラウラに歯が立たなかったそしてあたしとセシリアは地面に這いつくばった。ラウラはそこにレールカノンを打って来たあたしはただお兄ちゃんに助けを求めることしかしできなかつた S I D E O U T

ラウラがレールカノンを鈴達に向けて打って瞬間 バリン と音が鳴った。鈴は恐る恐る目を開けるとそこには金色のISに身を包んだ兄、和樹の姿があつた。

「お兄ちゃん助けに来てくれたんだ」

「当たり前だろ、俺は鈴の兄だからないつだって助けてやるよ」

「お兄ちゃん」

鈴は安心したのか気を失つた

「シャルル、一夏、鈴とセシリアを頼む」

「わ、わかった」

二人はキレた鈴劉の言葉を聞くと震えて返事をした

「ラウラ、お前は許さない」

「ふん、お前に許されなくても！」

ガキイン

「不意打ちだと卑怯な！」

「戦いに卑怯も何も無い」

俺はラウラの話の最中にラウラの懐に入り白虎双刀の虎の牙でラウラを斬るだがラウラのとっさの行動で致命的なダメージにはならなかつただか、ラウラはシールドエネルギー残量を見て啞然としていた。

なぜならシールドエネルギー残量が500あつたのは今は150しかないからだ

「クソ、かすった程度でこのダメージとは」

ラウラが出方をうかがっている間にシューティングBITEを出し

て攻撃した、ラウラは慌てて回避したそしてプラズマ刃構えて突っ込んで来た

俺はそれを簡単に避けるそしてラウラに挑発をした

「ドイツのISはこの程度かそれともパイロットがだめなのか？」

「貴様！」

ラウラは挑発に乗り無謀に突っ込んで来たその瞬間

キーン と音をならせ現れたのは千冬だった。千冬はやれやれと呆れながら俺に言った

「凰兄アリーナの防壁を壊すな、罰として今後大会まで私闘を禁じる解散！」 千冬の掛け声で生徒全員アリーナを後にした

第6話下(前書き)

短くなつてしまいましたがどうぞ

第6話下

第6話怒る龍 下

保健室

俺はラウラとの戦闘を終えて保健室にいる鈴とセシリアの元に來ている

「ありがとう、お兄ちゃん助けてくれて」

鈴は怪我をした腕を抑えながらにつこり微笑んだ

「あのまま戦っていたら勝てましたわ」

強気の発言をするセシリアだか彼女も大分痛手を負っている

「すまないセシリア試合の邪魔をして」

「あ、いえ別に鈴劉さんを責めてる訳じゃ無いですわ」

俺はセシリアに謝るとセシリアは申し訳ないように返事をした、するとシャルルが「好きな人の前でかつこ悪い所を見せたくなかつただけだよ」

と言った瞬間に鈴とセシリアが慌ててシャルルの口を抑えた

「シャルルさんわたくしは本当に勝てましたわ別に一夏さんに、などでわ」

「そうよ。あたしもお兄ちゃんのために……」

シャルルの言葉に？を浮かべる一夏と俯く二人を見守っていたその時

ドドド バタン

「織斑君、デユノア君、凰君！」

クラスの女子達が一斉に保健室に押し寄せた

「み、みんなどうしたの？」

シャルルが怯えながら聞いた

「……これ！」「……」

クラスの女子達に見せられたら紙を一夏が読んだ

「次回の学年トーナメントをタッグ形式行いますので生徒同士タ

ツグを組んでください。タッグが組めなかった場合抽選で決定します」

「とうわけで織斑君私と」

「私とタッグをデュノア君」

「頑張ろうね鳳君」

女子達がタッグの申し込みをしている中俺はシャルルと一夏を助けるために言った

「すまない、シャルルは一夏とタッグを組む俺はもう決まっているから」と言うと女子達達はとぼとぼ保健室を後にした

「鈴劉いいのか俺とシャルルが組んで」

「ああ構わない男同士の方がシャルルも気が楽だろ」

「うん、ありがとう鈴劉」

「俺の事は？」

「一様気遣ったつもりだがだめか」

「いや、大丈夫だサンキュー」

こんな話をしていると山田先生が保健室に入って来た

「すいません、オルコットさんと鳳さんいますか」

「はい、います（わ）」

「良かったお二人にお話しがあります。お二人のISのダメージレベルがCを超えてましたので次の大会には出せません、わかりましたか？」

「は、はい」

珍しく山田先生が強気で言ってきたので悔しくもはいしか言えなかった

「じゃお二人とも大丈夫なら自分の部屋に戻って下さい」

そして俺は怪我をした鈴を背中に乗せて保健室を後にした

第7話（前書き）

遅くなりました

最近書く時間がなくて久しぶりの投稿です

どうぞ

第7話

第7話介護する龍

俺は今廊下を歩いてるが周りの視線が痛いなぜなら

「なあ鈴？一人で歩けるんだからおりて歩いてくれないか？」

そう俺は鈴を背負いながら鈴の部屋に向かっていた

「やだ！お兄ちゃんはあたしの事嫌いになったの？」

「いや、嫌いになった訳じゃなくてな、まあいいか」

「お兄ちゃん、えへへ（6年ぶりのお兄ちゃんの背中暖かい）」

「どうした鈴？」

「なんでも無い」

「そうか」

兄妹でこんな話をしていた

「キヤーいいいなー私も運ばれたいな」

「兄妹っていいな」

女子生徒の羨ましそうに鈴を見てみると、突然一人の女子生徒が倒れた

「！大丈夫か！。鈴すまないが降りてくれ」

俺はすぐに女子生徒に近寄って意識確認をした、意識はあったが心配だったので俺は鈴を降ろすとすぐ女子生徒を抱きかかえて保健室に急いだ

保健室に着くと俺は女子生徒をベッドに寝かせて後は保健の先生

に任せたそして鈴の元に行こうとした時その女子生徒が目を覚ました

「ここ…は？」

「気が付きましたね、ここは保健室です。」

「私はどうして？」

「倒れた時に鳳君があなたをここまで運んでくれたのよ」

女子生徒と保健室の先生が話していたら女子生徒がこっちを向いて話掛けて来た

「あ、ありがとうございます／＼／＼」

「気にするな。それより気分は大丈夫か？」

「は、はい／＼／＼」

俺と女子生徒が話していると保健室のドアが開いた

「お姉ちゃん大丈夫!？」

その声と同時に入って来たのは本音だった

「大丈夫よ本音」

「こちらが本音の姉か」

「そうだよ、ありがとうねユウユウ」

「ユウユウ? まあいいかそれより本音次の大会のペア俺と組んでくれ」

「いいよっ」

「サンキュー。じゃあ俺妹を待たせてるから」

「「ありがとう(ございまして)／＼／＼」」

鈴の所に戻ると鈴を含む数人の生徒達が俺の良さについて熱く語っていた、すごく恥ずかしい

「鈴着いたぞ」

そう言つと俺鈴をベッドに寝かしたそしたら鈴が

「あたしが寝るまででいいから手をつないでてお願いお兄ちゃん」

鈴が上目使いで訴えて来た

鈴を泣かせたくない俺は当然手をつないだしかし10分もしない内に鈴は眠ってしまった

俺は鈴の部屋を後にして自室にむかった。自室ではシャルルが一人辛そうに考え込んでいた

「どうしたシャルル？」

「い、いや何でもない」

「嘘だ、言ってみな？」

「う、うん本当に僕はここにいていいのかな？」

「なあシャルルお前はここに居たくないのか？」

「違う居たくない訳じゃ無いけど、み…みんなに申し訳ないよ」

シャルルはついに目から涙を落とした

そんなシャルルに俺は

「もう少し自分で悩んでみな」

と素っ気なく言って自室を後にした

10分後

「シャルル飯持ってきたぞどつちがいい？」

俺は悩んでいるシャルルを気遣い飯を持ってきた

「あ！ありがとう…でも僕こんなに食べれないよ」

「半分は俺の分だから安心しろ」

「うんわかっ…た」

「どうしたシャルルまさか箸使えないのか？」

「うん、練習はしているんだけどね」

「すまない日本食しか無くてしょうがない食べさせてやる。どれ

がいい？」

俺がシャルルにそう言うのと初めは遠慮してきたシャルルだかやは

り箸を使うのが大変だったらしく食べさせてもらった

「はい、あーん」

「あ…あーん／＼／＼」

「どうだシャルル？」

「うん、おいしいよ。次は御飯がいいな」

「わかった。あーん」

「あーん／＼／＼」

こうして二人は甘い時を過ごした

第8話（前書き）

遅くなりました。

オリ主の初公式戦です。

第8話

さら 第8話対決する龍

大会当日

俺と一夏とシャルルは更衣室でトーナメント表の発表を待っていた、もちろん一夏はシャルルが女つてことは知らない

「なあ鈴劉本当に俺とシャルルがペアを組んで良かったのか？」

「気にするな、それに俺はシャルルのためにかわっただけだからない」

申し訳ないように言ってきた一夏を俺は負担をかけないように言った

「そろそろ発表されるよ」

シャルルの言葉でディスプレイを見る俺と一夏、そこに映ったのは

第1試合 第1アリーナ 凰 鈴劉&布仏 本音 VS 相川

優雅&サラ クレア

第2試合 第2アリーナ 織斑 一夏&シャルル デュノア V

S ラウラ ポーデビツヒ&篠ノ之 箒

「鈴劉お互い頑張ろうぜ！」

「ああ、勝ってくる」

そう言っただ俺は更衣室を後にした

第1アリーナ控え室

「そろそろだよ！ユウユウ」

本音はいつもより緊張した感じで話しかけてきた

「大丈夫だ、俺がお前を守る。行くぞ、本音！」

「おー！」

俺は布仏に声掛けると本音の返事を待ってISを起動させて控え室を出た。

第1アリーナ

第1試合が始まった。

「こっちのISは俺が使う《光龍》と布仏が使う《打金》 相手は《ラファール・リヴァイヴ》×2だった

俺は試合が始まる前相手の女子に声を掛けた。

「俺はどんな相手にも手加減はしない、お互いにベストを尽くそう」

「は、はい／／／」

俺の言葉に相手の女子顔を赤らめてうなずいた。

試合開始ブザーが鳴って試合が始まった

結果的にはやはり俺達が勝った。

当然と言つべきであるが基本的な動きしか出来ない相手にシューティングビットとソードビットでの連続技はさすがにひどすぎた。

相手もマシンガンで応戦してくるが全部かわすか玄武で防いだ、やはり実弾を跳ね返すことは出来なかった。

途中相手一人が無謀にもこちらに突っ込んで来た、だが俺はそれを玄武で押し返した。圧倒的な勝利をおさめた。

俺は玄武で跳ね返した相手に近ずいて声を掛けた

「相川さん大丈夫だった、怪我無い？」

「／／／だ、大丈夫だよ！心配してくれてありがとう／／／」

「それなら良かった。じゃあ俺は一夏達の試合を見に行くから」

「は、はい／／（カツコイイ）」

そう言つて俺は第1アリーナを後にした

「さあて一夏&シャルル対ラウラの試合はどうなっているやら」
「こつ呟きながら」

第9話（前書き）

遅くなりました。

第9話

第9話驚愕する龍

俺は嫌な予感がして急いで一夏達の控え室に向かった

「な、なんだ…あれは？」

控え室に着いて俺が見たのは千冬に似た姿をした黒いIS。そして、そのISの前で尻餅をついた一夏だった。

「大丈夫か一夏！」

俺はすぐに助けに行こうと思ったが一夏の一言で踏みとどまった

箒は一夏の無茶を止めに入った

「止めるな箒！あいつは俺が止める、俺が止めなきゃいけないんだ」

だか一夏は箒の止めを振り払ったその時パチンと音がなった

「な、ほ、箒」

「頭を冷やせ一夏IS相手に生身で挑むのか？」

「それは」

一夏は悔しそうに立ち尽くした

それを見たシャルルが一夏に

「じゃあ僕のISのエネルギーを一夏の白式に移してあげる」

「本当か！すぐ頼む」

シャルルの提案一夏は賛成してきた。そしたらシャルルが珍しく有無を言わないくらい強く一夏に言った

「絶対負けないって、約束して」

「わかった。ここで負けたら男じゃねえぜ」

「もし負けたら明日から女子の制服で登校してね」

「い、いいぜ望むところだ。絶対負けないからな」

一夏の表情に笑みが戻ったそして黒いISの前に立って《雪片式型》を構えた。そして黒いISがよろけた瞬間一夏は《雪片式型》を振った《雪片式型》があたたった所から弱ったラウラが一夏の方

倒れて来た。

一夏は倒れて来たラウラ小声で

「お前も守ってやるよ」
と言った。

「ふう、冷や冷やした」

「待て、鳳」

俺はそうつぶやいて控え室後にしようとしたら千冬に止められた

「何ですか織斑先生？」

「なぜあの時出て行かなかった」

「一夏の将来の為ですよ。一夏はあいつは俺が倒す、あんなやつに千冬姉を真似させてたまるかって言っていました」

「そうか、すまなかつた鳳」

「それに一夏の事が好きな妹のために一夏を活躍させないと」

「まったくお前は」

「まあまあ」

そう言っただけ俺は千冬と一緒にラウラの居る保健室に向かった。

妹、弟話をしながら

第10話(前書き)

遅くなりまた

最近文が短くなっているのだからからは頑張って長くします。

第10話

第10話終結させる籠

保健室

ラウラはあの後すぐ保健室に運ばれていた

「…ん」

「目を覚ましたかラウラ」

「教官何が起こったんですか？」

「機密事項だがVTシステムを知っているか？」

「ヴァルキリートレースシステム」

「そうだ、それがお前のISに積まれていた」

「そう…ですか」

ラウラは俯いてこたえた。千冬はそんなラウラに聞いた

「お前は誰だ？」

「私は…」

ラウラはその質問に答えられなかった。そしたら後ろから声が聞

こえた

「ラウラボーデビツヒだ」

「貴様は」

ラウラが声のしたほうを向くとそこには鈴劉が立っていた。

「お前は今日からラウラボーデビツヒだ。わかったな？」

ラウラは戸惑いながらもうなずいた

「よしよし。お前はお前だそれ以上でもそれ以外でもない誰でもないお前だわかったなじゃ後はよろしくお願いします織斑先生」

そう言っつてラウラの頭をそつと撫でて、俺は一夏達のいる食堂に向かった。

撫でられている時ラウラは気持ちよさそうに目を細めていた

「鳳鈴劉に織斑一夏」

「どうした、惚れたか？」

千冬はラウラが小声で鈴劉と一夏を読んだのでからかった。そしてたらラウラは顔を赤らめたが否定した

「い、いえ凰鈴劉は兄みたいですね。兄ってあんな感じ何ですか？」

「ふう、それはなってみないと分からないな。で、織斑は？」

「それは…」

夕方の保健室で一人は笑みをこぼしもう一人は顔を赤くしていた。

食堂

「なんだこれは？」

俺が食堂に着くと腹を押さえて気絶した一夏とただ呆然と見てたシャルルだった

「何があった」

「あのね」

俺の質問にシャルルは困りながら説明してくれた

「と言うことだよ」

「そうか大変そうだな一夏は」

「そうだね、一夏は唐変木だから」

「それとシャルル、さつきクラスの女子が泣きながら走っていったぞ？」

俺は食堂に行く途中に見たことをシャルルに聞いた。

「それはね、今回の学年別トーナメントで優勝したら、僕達の誰かときあえ付き合えるルールがあったらしいよ」

「そうか、トーナメントが中止になって良かったな」

「う…うん、そうだね」

俺の言ったことにシャルルは少し残念な顔をして返事をした。

「じゃ俺は一夏を部屋で寝かしてくるから待っていてくれ」

「うん、わかった。早くしてね」

「わかった」

一夏の部屋

気絶している一夏を寝かせて、俺は

「これから頑張れよ」

と言って一夏の部屋を出て食堂に戻った。

あの後、あんなことになるとは誰も知らない

第11話(前書き)

遅くなりました。

第11話

第11話 焦る龍

「はっ、先生今何て言いました」

久しぶりに俺は焦っていた。一夏を部屋に運んだ後再び食堂に着いたら山田先生に

「今日の頑張りによつて今日は男子も大浴場を使えるので準備をして来て下さい。先生は大浴場で待っていますから」

と言われた。その時俺は焦った。みんなの前では男子の格好をしているシャルルだが本当は女子だ、それに高校生の男女が一緒にお風呂に入ると言うのはかなりまずい気がする

そんな事を考えているともう自分の部屋に着いてしまった、そしてたらシャルルが

「鈴劉、どうしよう」

と言つて来た。

俺は良い案が浮かんだ訳でも無くシャルルに

「とりあえず準備をして行こう山田先生が待つてる」と言うことしか出来なかった

「あ、二人共こつちですよ」

準備を終えて大浴場に向かうと山田先生が大浴場前で立っていた

「あれ、織斑君はどうしたんですか？」

支度をして来た俺達に山田先生は一夏の事を聞いて来た。

「一夏なら自室で気絶しています」

「な、なんで気絶しているんですか！」

山田先生慌てて聞いて来た

「それは一夏の自業自得です。山田先生早く大浴場を開けてください」

「は、はい」

山田先生に大浴場の鍵を開けて貰い俺とシャルルは脱衣場にいた
「どうする、鈴劉？」

シャルルは慌てたように聞いて来た

「しょうがない、シャルル俺はここで待ってるから風呂に入っ
てこい」

「そんな悪いよ、僕が待ってるから鈴劉が入ってきなよ。」

「いいのか？シャルル」

「うん、僕のことには気にしないで入ってきなよ」

俺がシャルルに風呂を譲るとシャルルが遠慮して来た。

俺はシャルルの行為に甘えて風呂に入ることにした

「広いな、さすがIS学園の大浴場だ。とりあえず先に体を洗お
う」

大浴場に入って俺はまず体を洗い流してそれから湯船に浸かった

「久しぶりの風呂だな」

と言って俺は目を瞑った

チャポン

「ん、何だ？」

少し大きな水音が聞こえて来たから、俺は目を開けた

「お…おい、シャルル？」

目を開けたらそこにはタオルで体を隠している、シャルルだった

「そんなにまじまじ見ないでよ。鈴劉のエッチ」

「す、すまん／＼／＼」

そう言う俺はすぐにシャルルを背にした。

「珍しく鈴劉焦ってるね」

「当たり前だ。シャルル、俺は先に出る」

俺が大浴場を後にしようとして湯船から出ようとしたら

「待って！」

シャルルに腕を掴まれてまた俺は湯船に戻された、そしてシャルルは俺の背中に自分の背中をあててきた

「どうした、シャルル？」

俺の疑問にシャルルはゆっくり答えた。

「あのね、この前のこと何だけどね、僕この学園に残ろうと思っただそれとね」

シャルルはくっつけた背中を離し、鈴劉に後ろからそっと抱き付いた

「ちよ、ちよっとシャルル」

シャルルが後ろから抱き付いて来た時に鈴劉の背中に2つの柔らかな膨らみが当たって鈴劉は内心焦っていた。シャルルはそんな鈴劉に構わず話を続けた

「二人きりの時だけでいいから僕のことシャルロットって呼んで、それが、お母さんが付けてくれた僕の名前の名前だから」

鈴劉は焦っていた自分を落ち着かせて言った

「わかった。シャルロット」

自分の名前を呼ばれたシャルロットは嬉しそうに返事をした

「うん」

「シャルロット、俺は先にあがるお前はゆっくり浸かっつけ」

そう言っただ俺は大浴場を出て脱衣場で着替えて自室に向かった。

(明日、ラウラはどうなるかな?)

と思いつながら。

第12話(前書き)

遅くなりました

忙しくてこれからは月1の更新になりそうです

出来るだけ頑張るんで見守って下さい

第12話

第12話 約束する龍

同年代の女子と一緒に風呂に入ったその日俺は未だに収まらない胸の高鳴りのせいで、寝不足の状態で朝のHRを受けることになった。そう言えばシャルルは？

「はい、朝のHRを始めます。まず、皆さんに転校生を紹介し
ます。と言つかもう皆さん知って…」

最後の方山田先生は、小声で言った。

そしてクラスに入って来たのは

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願ひします。」
昨日まで男の格好をしていた、シャルロットが女の格好をしてい
た。

クラスみんなはこの事に啞然としていた、俺はシャルロット見
守っていた。

そしたらクラスの子の誰かが

「え、デュノア君は女の子だったの？」

「やっぱり、男の子であんなに可愛いはず無いもん」

「同じ部屋の鳳君は知っていたの？」

「そう言えば昨日男子が大浴場を使わなかった？」

「そう言えば、って事は織斑君と鳳君は知ってたって事！」

クラスの子が噂をしていた、そんな中一夏は訳の分からないよ
うな顔をしていた。

その時、物凄い音がして教室のドアが壊れた。

そして、そこから現れたのは、甲龍を纏った鈴だった。

「一夏ー！、お兄ちゃんー！のバカーー！」

鈴は怒りながら龍砲を俺と一夏に向けて放った。

「嘘だろー！」

「待て、鈴！。一夏は」
俺と一夏は目を瞑った。

「「「なんであんたが！（お前が！）（あなたが！）」」」
鈴、箒、セシリア、がこの場に意外な人物の登場に声を挙げた。
その声で俺と一夏は目を開けた。

そこにいたのは、大型レールカノンを失った、シュヴァルツエア・
レーゲンに乗っているラウラだった。

「助かった、サンキュー、ラウラ。…って言うかIS治ったんだ
な、すげーな」

「コアは無事だったからな」

「そうか、良かった？！」

ラウラは一夏の言葉を遮りキスをした。

「お前を私の嫁にする。これは決定事項だ、異論は認めん！」

「は…嫁？…婿じゃなくて？」

一夏は事態を理解出来ずポカンとしているが、一夏の周りは修羅
場と化していた。

俺はそれを（平和だな）と思いつつながら見ていた、そしたらラウ
ラがISを解いて俺の前に来た。

「どうした、ラウラ？」

ラウラは少し恥ずかしがりながら言った。

「鳳：鈴劉…：私の兄になってくれ／＼／＼」

ラウラの発言でクラスが騒然とした。

「ダメ、絶対ダメ！」

真つ先に反対したのは、鈴だった。

「なぜ、お前に反対されなければいけない？」

「当たり前でしょ、アタシはお兄ちゃんの妹だもん！」

鈴は勝ち誇ったように胸を張った、その姿を見ていたラウラは悔
しがつっていた。

「はあ〜」

俺は二人のやり取りを見て溜め息をしていた。

それを見たシャルロットが俺に少し赤くしながら話掛けて来た。

「ねえ、鈴劉、今週の日曜日…ほ、僕と…買い物に行かない？ /
 / / / /」

「ああ、良いぞ」

俺は買い物誘いを受けると、シャルロットは俺に向かって微笑んだ。

それを見た鈴とラウラが猛抗議して来た。

「お兄ちゃん（兄さん）！！」

「な、何だ？」

「アタシ（私）も行きたい（です）！！」

「わかった、鈴達は土曜日に行こうな、一夏も一緒に。」

こうして俺の休日は妹達のおもりと買い物に消えた。

話の途中一夏が

「なんで、俺まで」

と言っていたがあえてスルーした

13話(前書き)

遅くなりました
短いですがどうぞ

13話

13話 付き添う龍

シャルロットの女の子発言、そしてラウラの妹発言から次の日、俺は今、一夏と妹達とシヨピングモールに買い物に来ていた。

「これなんてどう、お兄ちゃん？」

「ああ、良いんじゃないか、なあ一夏？」

「ああ」

俺が一夏に話掛けると一夏は素っ気なく返事をした。

「何よ一夏、似合わないって言うの」

一夏の返事に鈴が拗ねた。

「いや、別に似合わないなんて言っていないぞ」

「ふん、どうせ内心思ってるくせに」

「だから、思っていないからな」

完全に拗ねた鈴にあたふたしている一夏に俺は助け舟を出してやった。

「鈴、そう拗ねるな。一夏だって鈴の水着姿を意識しているぞ」

「もう、始めから素直に言ってくればいいのに」

「あはは、」

鈴が一夏と水着を決めている時俺はふとラウラに目を向けた。

ラウラは自分の水着を選ぶわけでもなく、ただひたすらに鈴の買い物を見ていた。

「ラウラは水着、買わないのか」

俺はラウラに水着のことを聞いた。

「はい、私は学校指定の水着がありますので」

ラウラは学校指定のスクール水着で臨海学校を行くらしいそんなラウラに俺は助言をした。

「そうか、でもこの臨海学校は一夏の気を引くチャンスだぞ」

「で、ですが」

「大丈夫だ、少しくらいなら資金援助してやるし、水着選びも手伝ってやるぞ」

「それじゃ兄さんお願いします。」

「はいよ」

こうして俺とラウラの水着選びが始まった。

さっそく問題にぶつかった。

「これはどうだ？」

「……」

「はあ、ラウラ、せめて返事をくれ」

ラウラはどれを選んでよいのかわからず黙っている。

「そうだラウラ、確かこの学校に来る前、軍にいたよな？」

「はい、それがどうかしたんですか？」

「それなら、軍の仲間にラウラに似合った水着を選んでもらおう」

「それは良い案ですね兄さん、私はそうしますので、兄さんは自分の水着を選んでください」

ラウラがどんな水着を選ぶか、気になったがラウラの水着姿は一番に一夏見させた方がいいと思い、俺は一夏に声をかけて自分達の水着を買いに行った。

10分後

俺と一夏は自分達の水着を買い終わって、鈴の所に戻った。

ラウラに「水着は買ったか」と聞いた。

そしたらラウラは、「秘密です」と嬉しそうに返事した。

そして俺は時計を見て、今正午過ぎだったから俺は鈴達と昼食にしました。

この時一夏がファミレスと言っていた。

俺は鈴達の事を考えて、一夏を無視して近くのカフェで昼食を食べてから俺達は学校に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3892u/>

IS<インフィニットストラトス>鈴のお兄ちゃん

2011年9月26日18時33分発行